バンコクでの現地理解教育の実践

前バンコク日本人学校　教諭
埼玉県さいたま市立栄和小学校　教諭　花　房　秀　史

キーワード：現地理解，交流学習会，補習校巡回指導

１．はじめに

バンコク日本人学校では低学年はカセサート大学付属小学校，中学年はダラカーム校，高学年はシーナカリン大学付属小学校と毎年交流学習会を行っている。ゲスト・ホストを１年ごとに交代して実施してきている。学校内にはタイ人スタッフが多くいて，日々の学校運営上の様々な仕事をされている。学校のタイ人スタッフとの交流も低学年の総合的な学習の時間には位置づけられているが，この交流学習会が現地理解教育の中心となっている。そのため，準備，打ち合わせは細部まで入念に計画し，児童が主体的に運営していく体制を作り，毎年気づきの多い感動できる交流学習会になっている。

２．現地校との交流学習会

小中学部を含めて４校の学校と交流学習会を行っているが，どの学校でもタイの児童は礼儀正しく，常に微笑みを浮かべ優しく接することができていた。その中でもダラカーム校は唯一のタイ国公立の一般的な小学校である。タイの遊びやカトン（灯籠流し）作りを一緒に作りながら紹介してくれた。また，日本の文化としてうちわを作り，毛筆で絵や文字を書いて紹介した。みんな熱心に取り組み，言葉で伝わらない分をジェスチュアーで教え合うことができた。また，様々な遊びを通して更に交流を深めることができた。

交流会当日の様子

(1) 出迎え

ダラカーム校に着くと，あでやかなタイ衣装を身にまとった児童が出迎えてくれた。校門を入ると，サワッディカップ（カー）と手を合わせてさわやかなあいさつをしてくれるダラカーム校の児童。そしてタイの太鼓やすずなど民族楽器の演奏にあわせて踊り，私たちを歓迎してくれた。とても華やかで，「こんなに私たちを歓迎してくれてるんだ。」と盛大な出迎えに胸を躍らせながら，ホールの方へ向かった。

(2) 開会式

緊張したムードの中行われた開会式。まず，ダラカーム校の校長より「この交流学習会で，たくさんの友だちができるでしょう。両校の友情はいつまでも続くでしょう。」とあいさつがあった。そして，「交流学習会がきっかけとなり，みなさんが仲良くなり，両校の絆がさらに深まることを強く願っています。」と日本人学校の校長よりあいさつがあった。すると，両校から大きな拍手がわきおった。その後は両校児童によるあいさつ。ダラカーム校の児童が日本語でもあいさつを行い，日本人学校の児童は驚きとうれしさの表情を見せていた。

(3) 文化交流

①タイ文化

まずは自己紹介。あらかじめ練習してきたタイ語での自己紹介をした。話したことが何とか伝わってほっとし

たようであった。その後，ダラカーム校の児童から，カトンの作り方を教えてもらった。紙を折り，丸い厚紙に付けていく。子どもたちはどのようにするのか戸惑っていたが，身ぶり手ぶりやタイ語を使って作り方を教えてもらっていた。できあがったカトンを大事そうにながめていた。

②日本文化

全クラスうちわにタイと日本の絵を描いたり，文字を描いた。タイ語，英語，日本語，身振り手振りなどを用いて描いてもらったり，説明をした。タイ語を話せる児童は大活躍をしていて，みんなに頼られていた。作業が一つ一つできるたびに，喜びあい笑顔があふれ，交流が進んだ。打ち解けていく様子が見られた。

(4) スポーツ交流

スポーツは4種類を行った。ビンゴゲームは，2人でサイコロを1個ずつ持って行き，バケツの中に投げ入れて，その目の合計でビンゴをする。なかなか思った数にならなくて，ドキドキするゲームであった。バランス玉入れは三角の積み木を落ちないように渡って行き，その先にあるかごに玉を入れるゲームである。バランスを崩して落ちると，その場から投げ入れなくてはなりません。大縄は,制限時間内に何回跳べるかを競うゲームであった。輪投げは,二人一組になり，一人が輪を投げ，もう一人が持っている棒でうまくキャッチするというものであった。どのゲームもコツがあり，ダラカーム校の友達や先生に教えてもらいながら夢中になって行っていた。時間が経つにつれ，言葉の壁を越えてコミュニケーションがとれるようになり，ダラカーム校の児童と笑顔で触れ合う姿が見られるようになった。

(5) 昼食・ふれあい交流

お弁当はみんなで円になって食べた。表情にやわらかさが見られ，早く遊ぼうと意気揚々であった。昼食を食べると積極的に名刺交換をして，ともに明るく話している姿が見られた。ふれあい交流は，時間調整のためかなり短縮されてしまったが，子どもたちは短い時間を有効に使い，班ごとに事前に準備していた遊びをのびのびと楽しんでいた。外ではおにごっこ，竹馬，大縄などをやり，汗をたっぷりかいていた。中ではだるま落とし，お手玉，けん玉などをしていた。部屋の中は笑い声でつつまれていた。充実したふれあいができたようである。ある班では，おにごっこをすることをダラカーム校に伝えるとき，ジェスチャーで，走って逃げるんだよと伝え，いくよの合図で一斉に遊びが始まった。言葉がなくても共に上手に交流していた子どもたち。子どもたちにとってはこのふれあい交流がとても楽しかったようである。

(6) 閉会式

閉会式は日本人学校の泰日ソーランから始まった。ホールに活きのよい「ソーラン，ソーラン。」のかけ声が響きわたった。緊張していたようだが，音楽に合わせて堂々と踊り，終わったあとに大きな拍手をもらい満足そうであった。次は，ダラカーム校が「ロイクラトン」を披露してくれた。頭を左右に上手に動かし，指先を器用に反らしながら軽快に踊っていた。日本とは全然違うその文化と，その美しさに，日本人学校の児童は見とれていた。最後に「思いやりの花」の合唱。ホールには全員の大きな声が響きわたった。両校とも一生懸命歌って，心が一つになったようであった。

(7) 見送り

あっという間に交流を終え，帰る時間になった。ダラカーム校の児童は手に日本の旗をもって私たちを見送ってくれた。代表児童はバスのところまで見送ってくれて，日本人学校の児童はとても感動していた。日本人学校の児童は，バスからダラカーム校の児童が見えなくなるまでずっと手を振って別れを惜しんでいた。

(8) 成果

交流学習会を終えて，ほぼ全員が交流会は楽しかったと答えている。また，交流会を終えてタイのことが好きになった児童がたくさん増えた。これは，班ごとに文化交流やふれあい交流の準備を意欲的に行ってきたことで，交流学習会に対する意識が高まり積極的に交流できたからだろう。「交流を通して感じたタイのよさは」という質問には「みんな優しい」と答えた児童が多かった。今回の教え合ったり，一緒に遊んだりする交流する中で，ダラカーム校の子どもたちの表情や態度等から直接感じた感想であろう。言葉が通じなくても伝えることがはっきりとしていて，伝えようとする熱意があればジェスチュアーや表情で理解し合えることが分かった。

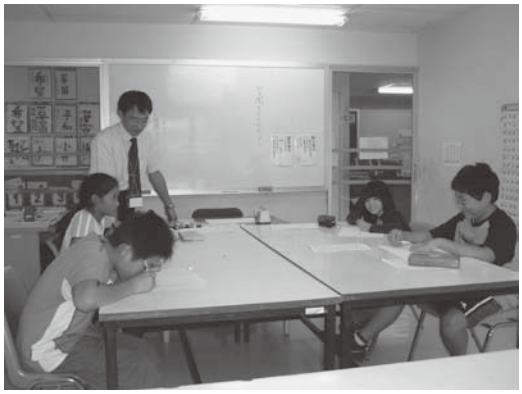
3．チェンマイ補習校への巡回指導

(1) チェンマイの自然，文化について

チェンマイ（Chiang Mai）はタイ北部最大の都市である。昔のラーンナータイ王国の首都。「北方のバラ」とも呼ばれている。寺院が多く，古都としての風格を備えていることから，俗に「タイの京都」と呼ばれたりもする。「北方のバラ」「タイの京都」とも称されるチェンマイは，タイの首都バンコクから北に700キロ，海抜310メートルにある盆地に位置する。

遷都700年を超える旧ランナー王国の首都で，タイ有数の古都，観光都市である。面積は2万平方キロメートル程度，日本の四国と同じくらいの広さである。チェンマイ市の人口は27万人程度，又，チェンマイ県全体では158万人ぐらいである。よく「タイ第２の都市」と紹介されることがあるが，人口から言えば，第４，第５の都市ということになる。

(2) 児童の実態



チェンマイには公立小学校が1,000校，中学校・高校が41校，国立大学が１校ある。このほか，インターナショナルスクールをはじめとする私立学校が多数あり，当地の在留邦人子女は，ウィークデーはインターナショナルスクールに通い，毎週土曜日に本校に通ってくる。

チェンマイ補習授業校は，チェンマイ日本人会が中心となって1997年４月に開校した。当初は日本企業所有住宅を借用して校舎としていたが，交通の便を考えて今年度から市中心部に移転し，子どもたちは新しい環境で学んでいる。毎週土曜日午前９時10分に朝の会が始まるまでに，かくれんぼや鬼ごっこで，子どもたちはすでに汗びっしょり。それほどみんな元気いっぱいである。

小学部は国語２時限，算数１時限，中学部は国語・数学１時限ずつ，教科書を中心に進めている。教科書以外の日本語にも自然に親しめるよう，読書や紙芝居などを授業に組み込んでいる。

昼休憩を挟んで，午後は課外授業を行っている。書道，理科，社会，音楽，そして今年から家庭科や体育も増え，「日本語で学ぶ」という目標のもとに，ふだんは学べない日本の文化や社会に触れる機会となっている。日本語での

会話は全く問題なくすることができる。

(3) 児童，保護者，補習校職員の思いや考え

普段の学習は，国語，算数が中心で社会，理科，道徳，体育等については，なかなか機会がないため，児童は巡回指導の時の理科，社会等の学習に期待しているようである。職員の方々もそのことを考慮して，今年度から教科を広げられるだけ広げてきている。在籍児童の半数が永住。残り半数が将来的に日本に帰国する予定であるらしい。そういう実態の中で，日本の学校で行われている学習をなるべく取り入れていきたいという願いがある。ただし，指導者数と時間，指導資料等の実態から，徐々に取り組んでいっているところである。巡回指導を行って，補習校の児童の学ぶ意欲の高さに感心させられた。今後も巡回指導を補習授業校の職員と相談しながら継続していってもらいたい。

(4) 成果

普段は英語やタイ語の中で学校生活を送っている児童達にとって，日本語に触れる機会は貴重な時間であることがよく伝わってきた。少ない機会であるが，読み・書き・計算だけでなく理科，社会，家庭科等を学ぼうとする意欲が高いことに感心させられた。

４．まとめ

バンコク日本人学校に赴任し，タイの自然や文化，歴史について多くのことを学ぶことができ，多くの人と接する機会を通して，タイ人の穏和で優しい性格を感じ取ることができた。また，タイで生活している日本人の思い・考えも理解できるようになった。今後はタイの良さを日本でできるだけ多く紹介していくと共に，世界中の人々に日本のすばらしさを自信をもって紹介できるようにしていきたい。